慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『三国志演義』の怒りの諸相
Sub Title	The dynamics of rage in the Sanguo zhi yanyi
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sōsuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.107, (2014. 12) ,p.65 (228)- 84 (209)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01070001-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『三国志演義』の怒りの諸相

吉永　壮介

一、序言

政治、経済、文化的な背景から必然的に起因したと思われる歴史的事実の影には、様々な利害や思想を宿した個人の思惑も交錯している。一つの事実に対して、何を真実として見るかは、後代の人間に与えられた叡智と誤謬に満ちた特権である。実在した人物、語り継ぐ民衆、描写する作者、鑑賞する聴衆や読者、それらのいずれの位相にも、必ずしも理知だけでは割り切れない個々人の生々しい感情がたゆたっている。過去と現代、現実と理想、英雄と庶民、そして日常と非日常との巨大な橋梁の一つとして、歴史に取材する白話小説は成立した。『三国志演義』（以下『演義』と略し、特に明記しない場合は毛宗崗本を指す[1]）にも、数多くの登場人物と、そこに描かれる長い年月に相応する様々な感情が横溢している。それらの感情は、実在した人物たちのものでもあり、作者のものでもあり、改訂者のものでもあり、また読者のものでもあり、その境界線は判然としない。本稿では、『演義』の描く怒りの諸相に焦点を当て、人物形象に施

された怒りの彫琢のディテールを精査し、嘉靖本から呉観明本までの流れとの比較のもと、毛宗崗本が怒りの概念を如何に描き分けたか、その感情表現の独自性について考察する。

二、『演義』に渦巻く怒りの諸相

怒りの範疇を厳密に限定することは難しい。概念的な感情表現のなかで最も典型的なのは「怒」の文字であり、『演義』では五百七十一回用いられている。[2] そのうち半数を超える三百三十三回は「大怒」であり、『三国志平話』以来の大仰で不安定な感情表現は『演義』にも継承されている。[3]「怒」に次いで頻出するのは「恨」二百一回であり、これに「怨」八十回、「忿」三十二回、「憤」二十二回、「不平」十六回、「怏怏」十四回、「慍」一回等が続く。

怒りを伴うことが明示、或いは予想される動作としては、「喝」百七十九回、「叱」百七十六回、「罵」百回、「責」七十九回、「厲声」五十二回、「拍案」五回、「扯碎」五回、[4]「扯毀」二回、「斬使」二回、[5]「扯衣而起」一回、「拂衣而起」一回、「擲表」一回等がある。

顔の表情に類する表現としては、顔色を変える「變色」が十八回、目を剝く「怒目」十二回、「睜目」六回、「瞪目」二回、「張目」一回、眉をつり上げる「睜眉」三回、歯ぎしりする「切齒」十九回、「咬牙」十一回、「咬齒」一回、「唾」五回等[6]が見られる。これらの言い回しは正史『三国志』には一例も見られないが、『演義』では多用されており、怒りの表白に顔面の振る舞いも大いに慌ただしい。

身体表現としての怒りとは別に、罵言による怒りもちりばめられている。「匹夫」四十三回、「孺子」十三回、「村夫」

六回、「豎子」六回、「豎儒」五回、そして「鼠輩」十一回、「鼠賊」三回、「鼠雀」二回等、それらは含みのあるやり取りではなく、いずれも直截的な罵倒が主意である。なかには呂布や袁紹が劉備を罵った「大耳」四回のような固有性の高い罵詈も見られる。[7]

この他にも「氣」「嚇」「嗔」等のように、様々なニュアンスで用いられる語も含めて怒りに類する表現や登場人物の行為を探せば、更に数多くを挙げることができるであろう。これを百二十回の章回で平均すれば、おそらく各回ごとに十五回にも及ぶ怒りが氾濫していることになる。[8]『演義』の描写は、まことに登場人物たちの已むことなく滾る怒りによって牽引されているといってもよい。

三、「怒」に生きる英雄、「怒」に死ぬ英雄

『演義』で「怒」の文字が現れないのは第四九回、第九三回、第九八回の三回のみである。本章では、登場人物を軸にして「怒」の描出について考察する。

登場人物中で最も数多く「怒」りを発するのは曹操であり、六十二回にも及ぶ。これに関羽三十七回、張飛三十一回、呂布二十一回、袁紹、孫策、劉備二十回、周瑜十九回、董卓十五回、孫権十三回、姜維十一回、趙雲、諸葛亮十回、袁術、馬超九回、李傕八回、司馬昭七回が続く。「怒」の主要な担い手は、君主もしくは勇猛で名を馳せた武将たちであることが瞭然とする。関羽と張飛は『三国志平話』でも怒りを原動力にして物語を推進させており、それは『演義』へも引き継がれることになった。また回数としては少ないが、董太后、何太后、徐庶の母、蔡夫人、呉国太、孫夫人、曹皇[9]

后、祝融夫人、李氏等、女性はかなりの確率で「怒」を表明する場面に遭遇している。男性中心の物語にあえて登壇する機会を得ているだけあり、感情表現の起伏に富む展開が準備されているのも首肯できる。[10]

「怒」は一つの事件の中で立て続けに発せられることが多いが、曹操は活躍期間の全般にわたり、常に怒りのボルテージを維持し続けている。「笑」「哭」「泣」のいずれでも曹操は上位を占めており、[11]感情表現の面から見ても『演義』を牽引するオールアラウンドプレイヤーであるといえる。関羽の五関突破のように、怒りによって敵将をなぎ倒してゆく場面もあるが、「怒」を連発するのは、予測と異なる事態に直面したときであることを思えば、往々にして滅亡の予兆として描かれることは想像に難くない。曹操も晩年近く、魏王に爵位を進める場面（第六六回）で四回、道士左慈に翻弄される場面（第六八回）で三回の「怒」を立て続けに発するが、いずれも致命傷には至らずに乗り切っている。[12]多くの群雄が怒りに呑まれて滅んだことに鑑みれば、最大の怒り手として終生怒り続けながらも、破滅せずに「怒」の荒波を生き抜いた曹操は喝采を贈られてもよい。

曹操と対照的なのが、ともに二十回の「怒」を数える袁紹、孫策、劉備である。袁紹は最終的に曹操に敗れたが故に、正史でも優柔不断で狭量な君主として描かれたが、とりわけ対曹操戦での狼狽ぶりは『演義』でも見苦しく描かれている。[13]第三〇回に八回の「怒」が集中しており、[14]怒りの矛先が敵将ではなく、田豊、許攸、淳于瓊等の自軍の参謀や部将に向けられているのが特色である。君主としての狭量を描出し尽くされたたうえで、袁紹は第三二回で死を迎えることになる。

孫策は『演義』中で最も直接的に「怒」と結びついた死を迎える人物である。第二九回、孫策は于吉に対して実に十六回にわたり「怒」り続けて、そのまま死に至った。「怒」が孫策の身体を借りて結晶し、そして砕け散ったかのような最

期の形相は凄絶で圧巻である。孫策は何故にかくも激しい「怒」の劫火に焼かれねばならなかったのか。第二九回の前半部分、叛心を抱く許貢や、自分を過小評価する郭嘉に対する孫策の「怒」は、いずれも呉観明本の描写を毛宗崗本は踏襲している。しかし、その後の于吉との顚末に於て、呉観明本では七回であった「怒」は、毛宗崗本では十二回にまで増幅されている。毛宗崗本が新たに「怒」を補った箇所もあれば、下記のように呉観明本の文字を毛宗崗本が意図的に「怒」に改変している箇所も見られる。

【呉観明本】策**恨**未消、命枷鎖下獄囚之。
【毛宗崗本】策**怒**未息、命且囚於獄中。[15]

【呉観明本】次日**急**歸城内、又城門見于吉。
【毛宗崗本】策**怒**歸府、又見于吉立於府門前。

毛宗崗本は孫策の感情を「怒」の語に収斂させようとしていることが分かる。毛宗崗本は、さらに于吉にも呉観明本までは見られなかった「怒目視策」という険しい表現を与えており、第二九回の「怒」の運用が孫策と于吉の確執という主題に大きく関わることが窺われる。[16]

曹操と左慈、孫策と于吉の顚末は、急進的な合理主義者と民衆の仰慕する神仙との対峙という意味に於て共通する出来事であるが、毛宗崗本が第六八回冒頭の総評で「于吉は孫策のもとに謁見を求めて来たのではないが、左慈はわざわ

ざやって来て曹操を愚弄した」として、プロットが似て非なるものである点を指摘しているのは、おそらく重要である。[17]いずれも最後まで相容れず、捻れの位相にあり続ける思想が存在しうることを物語中に明示する役割を果たしているが、[18]曹操は死を免れ、孫策は死に至らざるを得なかったのは、左慈と曹操、孫策と于吉の出逢い方そのものにも、その質的な相違がすでに隠喩的に示されているであろう。そして読者は、血気にはやり自らの死期を早めた若者として、嘲笑と哀惜の半ばする思いで孫策の退場を見送ることになる。このプロットは嘉靖本以前の祖本ですでに成立していたものと思しいが、毛宗崗本は第二九回冒頭の総評で「孫策が神仙を信じないのは、孫策の英雄たる証しである」「孫策の怒りは于吉への怒りではなく、士大夫たちが于吉を崇拝することへの怒りである」と述べ、[19]また雨乞いを成功させた于吉を孫策が殺す場面では、「このとき衆人が于吉を崇拝しなければ、孫策は或いは于吉を殺さなかったかも知れない。孫策に于吉を殺させてしまったのは、衆人の過ちなのだ」と喝破している。[20]そうした想いを際立たせるべく、毛宗崗本は孫策の「怒」を過剰なまでに増幅させて、時代に先んずる明確な意識を持ち得た英雄には非業の死が与えられることを、憎悪にも似た激しい皮肉を以て示した。

『演義』に見られる感情表現の多くは嘉靖本以来踏襲されたものであり、「怒」の内包は雑多である。必ずしも正しいから怒るのではなく、危うく、疚しいから怒ることもしばしばである。倫理的な規範を示すものではなく、概して短絡的な感情の発露としての「怒」が氾濫しているとも言える。そのなかにあって、執拗なまでに書き増された小覇王孫策の「怒」には、明以来の批評を経た毛宗崗本が自覚的に再定義して描出した、人間に対するある種の深い不信感を伴う感情表現の一つの鋭角を垣間見ることができよう。

次に、劉備は「喜怒不形於色（喜怒を色に形わさず）」（『三国志』蜀書・先主伝、『演義』第一回）と称されているに

もかかわらず、『演義』ではよく泣くばかりでなく、しばしば怒りにも苛まれている。劉備が最初に「怒」を発するのは、曹操麾下の部将呂曠に対してである（第三五回）。温厚なる君子が怒る必然性が希薄に思われるが、嘉靖本以来踏襲されている場面である。基本的には温厚な人物として描かれている劉備の「怒」が本格的に炸裂するのは、関羽の死の顚末である。赤壁の戦いが戦闘や謀略の描写における『演義』のクライマックスであるとすれば、関羽の死から夷陵の戦い、そして白帝城の死へと到る劉備の描写は、怒りと慟哭の乱舞する感情表現に於けるクライマックスを形成していると言えるだろう。

第七七回以降、関羽を失った劉備の「怒」は十五回に達する。臨終の直前に「怒」を連発するという点では袁紹や孫策と重なる。しかし袁紹や孫策の「怒」が毛宗崗本で増幅されているのに比べると、劉備の「怒」は嘉靖本の時点でほぼ完備しており、『三国志演義』の祖本成立時にすでに重要なモニュメントとして、毛宗崗をも納得させる完成度を有していたと言えるだろう。

劉備の「怒」は関羽の死に起因しているため、その晩年に集中しているのは当然ではあるが、視点を変えて巨視的に俯瞰すると、物語に於ける「怒」の力学の輪郭が浮かび上がる。最大の怒り手である曹操は第七八回で没し、それに次ぐ怒り手であった関羽は第七七回、張飛も第八一回に物語から退場する。温厚であるはずの劉備が発した「怒」二十回のうち十五回は第七七回以降であり、とくに張飛が物語から退場した第八二回から第八三回にかけて、八回の「怒」が集中している。そして劉備が第八五回に没すると、それまで一度も「怒」ることのなかった諸葛亮が「怒」り始めている点は注目に値する。さらに諸葛亮の「怒」が第一〇二回で途絶えると、第一〇三回からは司馬懿と姜維が俄に「怒」り始めるという構図が鮮明である。[21]

これらのことを重ね合わせると、「怒」の感情の主要な担い手が物語の中で移行してゆく様相が窺われる。「泣」という感情表現を伴う動作が、献帝、劉備から諸葛亮へと継承されているのと同様のリレー現象が、「怒」に於ても成立していることを示していよう。[22]

四、毛宗崗本に見える「怒目」と「睜目」

『演義』の怒りの内包は雑多であり、完全に系統だてて論ずることはできないが、前述の孫策に対する毛宗崗本の意図的な加筆や「怒」の担い手のリレー現象の他にも、幾つかの論ずるべき特徴が見られる。

「怒目」と「睜目」は日本語に訳される際にはいずれも「目を怒らせ」「目をかっと見開き」等として区別をつけ難いが、『演義』の用例を詳細に見ると、そこには温度差が感じられる。「怒目」は十二回用いられており、動作の主体は張飛二回、呂布、典韋、関羽、于吉、凌統、趙雲、徐晃、曹操、龐徳、姜維配下の諸将が各一回ずつである。「睜目」は六回用いられており、動作の主体は張飛三回、吉平、張任、司馬懿が各一回である。吉平が拷問されるときや（第二三回）、司馬懿が危地に陥ったときに状況を探っている例（第一〇四回）もあるが、「目を剝く」のはほぼ猛将たちの専売特許であり、理知的な文官が見せる振る舞いではないことが分かる。そのうえで、どのような場面で用いられているかを概観すると、いずれも攻撃的で不服従の眼差しであるには相違ないが、「怒目」は積極的に「目を怒らせて」いる場面が見られるのに対して、「睜目」は全て策に窮した場面であり、言わば追い詰められた窮鼠の怒りの眼差しとして描かれている。

毛宗崗本に見える「睜目」六例は全て呉観明本から踏襲したものであるが、「怒目」十二例のうち五例は呉観明本には見えず毛宗崗本が改変を加えたものである。毛宗崗本が新たに加筆した「怒目」を列挙すると、呂布「怒目而視」（第三回）、于吉「怒目視策」（第二九回）、凌統「只是怒目而視甘寧」（第三九回）、張飛「怒目横矛」（第四二回）、曹操「怒目視帝」（第六六回）である。張飛を除く四例は、「怒目」だけではなく「而視」のように相手を伴う言い回しを用いて、怒りがその対象に向けて先鋭化している様を伝えている。こうした「怒目」は、毛宗崗本が必然性をもって補筆した箇所と見なせるであろう。「怒目」と「睜目」は、原文ではまさに、目は口ほどにものを言っているのである。

五、反復される怒り

『演義』の怒りは単発的に発せられるものがほとんどであるが、反復される怒りが形成されているものもある。『演義』で同一の対象に対して反復する最も印象的な怒りは、于吉に対する孫策と並んで、諸葛亮に対する周瑜であろう。諸葛亮への嫉妬から憤死する周瑜の姿は、凄絶というにはむしろ滑稽に近い。周瑜の盟友である孫策の死も、執拗なまでの怒りに苛まれてのものであったが、嘉靖本にすでに見られる周瑜の戯画化された怒りの様相もまた、悪意に満ちた筆致であると言ってよいであろう。

一対一の対人関係ではなく、複数対一人という関係に於て反復されるものとして、個人の身体的特徴もしくは出自に対する冒瀆の罵詈がある。周知の如く、劉備の「大耳」がその筆頭に挙げられよう。劉備は四回にわたって「大耳」と罵られるが、これは罵言であると同時に、張飛の「豹頭環眼」と同様に容貌に関する人物形象として論ずるのが適切で

あろう。[23] 他に特定の人物のみに浴びせられる罵言としては「村夫」がある。「村夫」六回のうち、一回は劉備に対して投げかけられた言葉だが、残りの五回は全て諸葛亮に対するものである。そこには『三国志平話』ですでに定着したイメージが影響しているであろう。[24]

個人を主体もしくは対象とする怒りの反復ではなく、人物を跨いで同種の怒りが描写されるケースも見られる。呉の老臣張昭が、血気盛んな若き君主である孫策と孫権を「いっときの怒りにまかせてはなりません」と諫める場面がある（第二九回、第五六回）。呉観明本では、孫策には「一次之忿」、孫権には「一次之氣」と異なる言い回しであるのに対して、毛宗崗本はいずれも「一次之忿」に統一して作る。同じ性質をもつ兄弟を同じ「忿」の語で諫める老臣という構図に、些か皮肉を込めた毛宗崗本の改変の跡が見える。

六、毛宗崗本に見える「忿」

毛宗崗本には「忿」の文字が三十二箇所用いられている。そのうち「忿忿」という畳語の一文字分や、「不忿」という否定形を除くと、二十七の場面で用いられていることになる。セリフのなかで「誰々が忿（いか）って」という具合に用いられている場面も多く、また演技として「忿」っているケースもあるが、それらも含めて「忿」の動作主を列挙すると、姜維三回、黄蓋、孫権が二回、袁紹、呂布、管亥、蔡陽、孫策、曹仁、王威、周瑜、夏侯淵、孟獲、馬忠、祝融夫人、張郃が各一回、それ以外に、司馬懿麾下の魏の将士五回、劉備の諸将一回、蜀と呉との外交関係についた述べた場面での用例が一回である。

「忿」は抑圧された被害者的な意識を含んだ怒りの表白であることが多く、恨みがましく激しい感情が通底している。動作主のほとんどが魏と呉の人物であるのは、そこにある種のネガティブな評価が滲むからであろう。蜀陣営で個人名を挙げて「忿」が用いられているのは二名のみであるが、そこに馬忠と並んで姜維の名が挙がるのは興味深い。

姜維が「忿」るのは、諸葛亮が延命の祈禱をしている際に、消してはならぬ燈火を魏延が誤って消してしまったときと（第一〇三回末尾、第一〇四回冒頭で、厳密に言えば同じ場面）、宦官黄皓を粛正できなかったとき（第一一五回）である。この三箇所とも呉観明本では「忿」の文字は使われておらず、いずれも毛宗崗本が書き加えたものである。劉備、関羽、張飛、諸葛亮らは数多く「怒」ったが、「忿」ることはなかった。姜維も呉観明本までは「忿」っていなかったにもかかわらず、毛宗崗本が敢えてネガティブな遺恨の色彩を帯びる「忿」を与えたのは如何なる所以であろうか。そこには、「泣」の経脈が劉備、諸葛亮から姜維には継承されていないことと同様に、[25] ある種の精神的な断絶が示されていよう。

しかし見方を変えて、姜維に「忿」が与えられているのは諸葛亮の死を防げなかったときと、蜀を滅亡に導く黄皓を除けなかったときのみであることを思えば、毛宗崗本はまさに蜀が滅びゆく定めを恨みがましく姜維に託して、読者とともに負の感情を共有する役割を与えた側面があるとも言えるだろう。正統が滅びゆき、物語が終焉に導かれる「忿」りを託せる人物は、もはや姜維しか残されていなかったということである。

七、毛宗崗本に見える「憤」

毛宗崗本には「憤」の文字が二十一箇所用いられている。[26] そのうち、「憤憤」という畳語の一文字分や、同じ場面でセ

リフが繰り返しされている箇所を除くと、以下の十九の場面で用いられていることになる。

①丁管が董卓に「憤怒」（第四回）、②伍孚が董卓に「憤恨不平」（第四回）、③曹操の檄文「共洩公憤、扶持王室」（第五回）、④呂布が董卓を評して「罪悪貫盈、人神共憤」（第九回）、⑤挿入詩で李傕と郭汜の内心について「誰知李郭心懐憤」（第一三回）、⑥趙彦「憤操専横」（第二〇回）、⑦劉備が曹操の振る舞いに「不勝悲憤」（第二一回）、⑧陳琳の檄文「自是士林憤痛、民怨彌重」（第二二回）、⑨董承「見曹操驕横愈甚、感憤成疾」（第二三回）、⑩諸葛亮が東呉での舌戦にて曹操を評して「天下之所共憤」（第四三回）、⑪張昭が諸葛亮を評して「彼因自欲雪憤」（第四四回）、⑫黄奎が曹操に憤慨する様子を李春香が見る「見黄奎憤恨」（第五七回）、⑬荀攸が曹操の魏王就任に反対して「憂憤成疾、臥病十数日而卒」（第六六回）、⑭吉邈、吉穆が曹操の専横に対して「感憤流涙、怨氣沖天」（第六九回）、⑮龐徳を描いた絵「龐徳憤怒不屈、于禁拜伏於地」（第七九回）、⑯于禁が自分の無様な姿の描かれた絵を見て「又羞又惱、氣憤成疾、不久而死」（第七九回）、⑰呉の諸将が劉備と戦おうとしない陸遜に「衆皆憤憤而退」（第八三回）、⑱田丘俠が司馬師に「心中憤怒」（第一一〇）、⑲挿入詩で傅僉について「一日抒忠憤、千秋仰義名」（第一一六回）。

毛宗崗本に見える上記十九例について、嘉靖本、呉観明本と「憤」の字の有無を対照すると、

嘉靖本、呉観明本、毛宗崗本　全てに有り　⑦⑭⑰
嘉靖本無し、呉観明本有り、毛宗崗本有り　④⑤
嘉靖本有り、呉観明本無し、毛宗崗本有り　①[27]
嘉靖本無し、呉観明本無し、毛宗崗本有り　②③⑥⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑮⑯⑱⑲

となり、十九例のうち十四例は、呉観明本に見えなかった箇所に毛宗崗本が新たに加えたものである。その共通点は、朝廷もしくは君主に対する忠節の心が、横暴なる権力者によって撓められたときに発せられていることにある。例えば、

⑫黄奎が曹操に憤慨する様子を李春香が見る場面（第五七回）

【呉観明本】黄奎回家、恨氣不收、…其妾對澤曰、「黄侍郎今日商議軍情回、意甚恨、不知爲誰。」

【毛宗崗本】黄奎回家、恨氣未息、…妾見黄奎**憤**恨、遂對澤曰、「黄侍郎今日商議軍情回、意甚**憤**恨、不知爲誰。」

この場面、毛宗崗本では、すでに呉観明本が記している「恨」だけでは不十分であり、「憤」の文字を加えることを以て、黄奎の漢王朝への赤心と曹操の専横への憤りを示す指標と為している。

毛宗崗本が描く「憤」は、各人が所属する勢力における道義的な拘束力に準ずるため、必ずしも後漢や蜀への忠誠心の称揚に限定されない点が特徴的である。物語前半では、董卓や曹操という漢王朝を内部から蝕む者への「憤」を主潮とするが、物語後半で曹魏政権が確立されるに及び、⑮龐徳と⑯于禁の魏に対する忠誠心の対比や、⑱曹氏を圧迫する司馬氏への毋丘倹の怒りにも「憤」の文字が用いられている。毛宗崗本の「憤」は、正しくも弱き者たちが発する倫理的・道義的な憤りであり、滅びゆくことを代償に、称揚されるべき感情表現として用いられている。忠節の称揚というベクトルが定まっているという点では、雑多な要素の集積体である「怒」とも、ある種のネガティブな感情を内包する「忿」とも異なっている。

毛宗崗本は「泣」を「哭」と区別して特定の人物にのみ用いることによって、後漢から蜀への系譜に正統性を附与する感情表現として用いているが、[28]「憤」は各人がそれぞれの信ずる価値観のもとで発することが評価される表現であるという点、質的に異なる扱いが与えられている。毛宗崗本は後漢から蜀への正統性を強固に謳い上げる一方で、忠節の信念そのものに対しては、所属陣営を問わず一定の評価を与えていたことが示されている。

毛宗崗本の描く「憤」が如何に強く道義による拘束力を反映しているかについて、以下の⑨⑬⑯の例を挙げる。いずれの箇所も、呉観明本は嘉靖本の描写を踏襲している。

⑨董承が曹操の専横を見て嘆く場面（第二三回）

【呉観明本】自元旦朝賀處、見曹操傲慢公卿、因此感病回家。

【毛宗崗本】建安五年元旦朝賀、見曹操驕横愈甚、感**憤**成疾。

⑬荀攸が曹操の魏王昇進に反対し、曹操の不興を買う場面（第六六回）[29]

【呉観明本】曹操聞之、大怒曰、「此人又欲效荀彧耶？」荀攸知之、當年十月、臥病不起、十數日内身亡。…荀攸亡年五十八歳。操厚葬之、遂罷魏王事。

【毛宗崗本】曹操聞之、怒曰、「此人欲荀彧耶？」荀攸知之、憂**憤**成疾、臥病十數日而卒、亡年五十八歳。操厚葬之、遂罷魏王事。

⑯蜀に囚われ、後に呉を経由して魏に戻った于禁が、自分の無様な姿の描かれた絵を見せられる場面（第七九回）

【呉観明本】（該当するエピソード無し）

【毛宗崗本】當下于禁見此畫像、又羞又惱、氣**憤**成病、不久而死。

かく見れば、毛宗崗本の「憤」は、呉観明本では漠然としていた道義的な心情に一つの明確な形を与え、時に病を発して死に至る要因とすらなる強力な拘束力を持つものとして描かれていることが分かる。

『演義』で最後に「憤」の字が現れるのは⑲傅僉を詠んだ挿入詩である（第一一六回）。魏に降った蔣舒と、蜀に忠節を尽くして自刎して果てた傅僉が対照をなす場面で、呉観明本は静軒先生の詩「魏將西驅十萬兵、漢人無計守陽平。蔣舒降虜傅僉死、尚有流芳遺臭名。」を挿入している。毛宗崗本は静軒先生の詩を省き、かわりに「後人有詩讃曰」として、「一日抒忠憤、千秋仰義名。寧爲傅僉死、不作蔣舒生。」の詩を挿入する。句中の「忠憤」「義名」の対に、毛宗崗本の「憤」の位相は明らかである。それに加えて、嘉靖本から呉観明本までは、傅僉の死の直前に「怒」二回と「忿怒」一回を用いているが、毛宗崗本は最後の「忿怒」を省き、かわりに「忠憤」の語を与えている。毛宗崗本に於ける傅僉の忠節の死は、呉観明本までの「忿」ではなく、「憤」の一字に込めて描破されたのである。

八、結語

『演義』には、概念的に心情を表す表現、怒りの表白としての動作、罵語、反復を利用した怒りのアピールといった

様々な形態の怒りが描出されている。感情表現は人物形象の重要な一部分であると同時に、「怒」の主体がリレーすることに見られるように、物語構造の要請によって表面化しているという側面を指摘することができる。これは「笑」「哭」「泣」も含めた感情表現の一部分として理解すべきことであり、また『三国志演義』祖本ですでに見られる傾向と、毛宗崗本が独自に改変した傾向がある点についても、常に留意する必要がある。

概して言えば、毛宗崗本の感情表現は、思想的な要素を担う用語として精錬の度を増している。嘉靖本以来、最も大量に現れる「怒」は、道徳や倫理に必ずしも依拠しておらず、往々にして個人の利益と感情に終始する。毛宗崗本は、孫策と于吉の例に見られるような「怒」の加筆修整を行いつつ、「忿」は遺恨的な要素を込めて描き、また「憤」は所属陣営を問わぬ忠節の称揚といった共通点を以て紡いでいる。毛宗崗本は呉観明本までの感情表現を見つめ直して、各種の概念を特化し自覚的に再構成して描出していると言ってよいであろう。

毛宗崗本には尊劉貶曹の道義的な規範を切望する想いが溢れている一方で、怒りによって滅び行く人々を冷静に見つめ、分析して分類し、個別の標識を与えているという側面もある。道義的な熱さのみではなく、明以降の皮肉で冷めた批評眼も多分に反映されている毛宗崗本の感情表現は、複合的な視野を以て検討されるべき対象であると言えるであろう。

注

1　『三国志演義』の版本系統については、中川諭『『三国志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八年）第二章「二十四巻系諸本の相互関係」第二節「『李卓吾先生批評三国志』」、第三節「毛宗崗本の成立過程」等、参照。

2　統計は台湾中央研究院の漢籍電子文献瀚典全文検索系統2.0版 http://hanji.sinica.edu.tw/ に拠る。（二〇一四年十月十七日閲覧）本稿「二、『演義』に渦巻く怒りの諸相」では、全体の傾向を概観しつつ文字の異同を確認する必要上、「忿忿」のような畳語も基本的に全てカウントしているが、例外については注記する。「三、「怒」に生きる英雄、「怒」に死ぬ英雄」以降は、各人物ごとのカウントの際、他の人物のセリフで「怒りなさるな」「誰々は激しく怒っており」等と触れられている「怒」の字はカウントするが、「怒らなかった」等の否定形はカウントしていない。また題目、引用されている詩詞のうち、本文の内容と重複しているものも省いている。基準の設定の仕方によって異なる結果が出るので、あくまで概況を見るものとして参照されたい。なお同データベースでの検索によると「怒」は五百七十箇所該当するが、第九七回の「孔明大怒曰、「汝燒吾雲梯…」」の箇所が欠落していてカウントされていないので、本稿ではその分を加算して五百七十一回とした。他にも欠落している箇所があるかも知れない。

3　李福清氏は「喜、怒、驚の三種の感情は『三国志平話』の本文中で数多く見られ、これは人物の内心が不安定であることを証明している。彼らは突然激しく怒ったり、またそれとは逆に狂喜したり、見聞きしたことに驚愕するのである」と指摘する。（『三国演義与民間文学伝統』（上海古籍出版社、海外漢学叢書、一九九七年）第一部分「『三国演義』的源流」「『三国志平話』的思想基礎和人物描写」「人物情感的描写」一一四～一一七頁、参照）『演義』に於て「大怒」が「勃然」という語に導かれることが多いのも、同じ流れの上にあろう。なお『演義』中に「勃然」は二十一例見られ、「勃然大怒」十五回、「勃然變色」六回であり他の用例は見えない。『演義』では「勃然」とすれば必ず大いに怒るか色を変ずるのである。

4　「扯碎」は六例あるが、第八一回の李意は怒りによるものではないためカウントしていない。なお当該箇所は李意が描き終わった絵を「便一一扯碎」するのだが、中央研究院の漢籍電子文献は誤って「便二扯碎」に作る。

5　「斬使」は五例あるが、曹操からの使者を周瑜が斬る場面（第四五回）で三回、劉封が孟達からの使者を劉封が斬る場面（第七九回）で二回用いられており、出来事としては二例である。

6　「唾」は十四例あるが、そのうち九例は「唾手可得」「唾手而得」等の用例である。

7 「大耳」は五例あるが、第一〇七回の司馬師の容貌描写は罵言ではないためカウントしていない。

8 「氣」に関しては様々な用例が見られるため、稿を改めて別途論ずる必要があろう。「嚇」は権力もしくは武力を背景とする威嚇のニュアンスであり、九例のうち六例が「嚇得」の形で用いられている。「嗔」は七例のうち六例までが否定、禁止、或いは「嗔りから喜びに転ずる」といった形で用いられており、肯定形で「嗔」るの意味で用いられているのは、第四〇回で蔡瑁が劉表について述べた「主公必生嗔怒」のセリフのみである。

9 張飛の長坂橋での活躍を讃える詩が第六一回にフラッシュバックとして挿入されているが、その詩の「怒」はカウントしていない。

10 毛宗崗本の女性重視の傾向については、渡邊義浩・仙石知子『「三国志」女性たち』（山川出版社、二〇一〇年）に詳しい。「終章　毛宗崗本における女性像」一七四～一七五頁に於て、毛宗崗本の「読三国志法」で女性に関する記述が多く見える点について、明末清初、女性を扱う小説が増え、女性が説唱文学の弾詞を見聞する機会も増えたという背景があることを指摘する。また熊篤・段庸生『『三国演義』与伝統文化遡源研究』（重慶出版社、二〇〇二年）第一章「『三国演義』与倫理学」第三節「従『三国演義』看「婦道」観念的経権」二六～三九頁は、貂蟬、樊氏、呉氏、徐夫人、孫夫人、祝融夫人、黄氏、徐庶の母、姜叙の妻、趙昂の妻、李氏、崔夫人を挙げて個別に論じている。

11 拙論「『三国志演義』の「笑い」の位相について」（『藝文研究』第一〇四号、二〇一三年六月）、及び「『三国志演義』の涙の力学」（『藝文研究』第一〇五号、二〇一三年十二月）、参照。

12 左慈の伝承については、小南一郎『中国の神話と物語』（岩波書店、一九八四年）第三章「「神仙伝」――新しい神仙思想」、前田繁樹「曹操幕下の仙者たち（上）―左慈を中心として―」（『中国古典研究』第三七号、一九九三年）、中鉢雅量『中国小説史研究』（汲古書院、一九九六年）第1章「神仙伝記の変容」、及び拙論「『三国志演義』の左慈像について」（『藝文研究』第七六号、一九九九年十二月）等、参照。

13 中鉢雅量、注一二前掲書、「附論2『三国演義』の表現手法」「三　誇張の方法」三一一～三一四頁、参照。

14 第三〇回に見える袁紹の「怒」八例のうち、「紹因怒、欲斬田豐。」「紹怒叱曰、「汝乃得罪之人、何敢妄言惑衆！」」の二例は、呉観明本に無い箇所に毛宗崗本が書き増したものである。

15 本稿の毛宗崗本の引用は、『毛宗崗評点三国演義（上・下）』（上海古籍出版社、一九八九年）排印本に拠る。呉観明本の

16 引用は、徳田武編『李卓吾先生批評三国志』（ゆまに書房、一九八四年）影印本に拠る。なお嘉靖本は、『古本小説集成』（上海古籍出版社）影印本を参照した。

17 複数の感情表現を「怒」に収斂させる同様の例は他にも見られる。例えば馬超について、第五十九回の呉観明本が「馬超甚恨曹操」とする箇所を毛宗崗本は「馬超大怒」に作り、第六四回の呉観明本が「超心不喜」とする箇所を毛宗崗本は「超大怒」に作る。なお、逆に呉観明本の「怒」を毛宗崗本が削除している例もある。第二九回では、呉観明本「策怒將于吉屍號令于市」を毛宗崗本は「策命將其屍號令於市」に作る。毛宗崗本は、孫策が怒りにまかせて于吉を棄市したのではなく、合理的な判断のもと下した命令である、とする意図であろう。

18 第六八回冒頭、毛宗崗総評：曹操之遇左慈、與孫策之遇于吉彷彿相似、而實有大不同者。于吉非來謁孫策、左慈特來謁曹操、是于吉無意、而左慈有心：于吉不敢犯孫策、左慈敢於侮曹操、是于吉沒趣、而左慈有膽：于吉索命、而左慈不索命、是于吉死、而左慈不死：孫策殺一于吉、便處處見有于吉、曹操殺了無數左慈、却不見有一個左慈、是于吉不能空、而左慈能空。于吉未得爲仙、若左慈之仙則眞仙耳。

19 周建渝『多重視野中的『三国志通俗演義』』（中国社会科学出版社、二〇〇九年）第四章「「衆声喧嘩」：『三国志通俗演義』的「多重対話」特質及其意義」「一　孫策与于吉的対話」「二　左慈与曹操的対話」「三　両組対話之関係及其意義」九〇～一〇四頁、参照。

20 第二九回冒頭、毛宗崗総評：孫策不信于神仙、是孫策英雄處。…孫策之怒、非怒于吉、怒士大夫之羣然拜之也。

21 第二九回、毛宗崗評：此時衆人不羅拜、孫策或未必殺吉。使策果於殺吉者、皆衆人之過也。

22 毛宗崗本では、諸葛亮の「怒」は第八九回に一回、第九六回に一回、第九七回に四回、第一〇〇回に一回、第一〇一回に二回、第一〇二回に一回見える。司馬懿の「怒」は第一〇〇回に一回、第一〇三回に一回、第一〇六回に四回見える。姜維の「怒」は第一〇三回に一回、第一〇四回に一回、第一〇七回に二回、第一一二回に一回、第一一五回に二回、第一一六回に三回、第一一七回に一回見える。

注11前掲、拙論「『三国志演義』の涙の力学」、参照。但し、「泣」の主体のリレー現象は毛宗崗本の改変によって意図的に構成されているが、曹操、関羽、張飛から劉備、諸葛亮への「怒」のリレーは、嘉靖本から呉観明本にかけてすでにほぼ整えられている点は異なっている。また「泣」の経脈は、後漢から蜀への正統性を附与する表現として毛宗崗本に

於て再構築されているが、「怒」に関してはそうした要素は見られず、物語を推進する感情的な熱量の維持という側面からのみ捉えるべきである。「泣」に見える理念的な統一性との類似は、後述する「忿」「憤」に於て指摘することができる。

23 劉備が「大耳」と罵られるのは、第一六回、第一九回に二回、第二六回である。なお人物の容貌に関しては、小川陽一『日用類書による明清小説の研究』（研文出版、一九九五年）第三篇「明代小説と占卜」第一章「明代小説における相法」に詳しい。

24 「村夫」の用例は、劉備は第一四回、諸葛亮は第三七回、第三八回、第四一回、第五二回、第九九回に見える。諸葛亮に対する「村夫」の蔑称については、伊藤晋太郎「周瑜描写の踏襲に関して」（『藝文研究』第七八号、二〇〇〇年）、参照。

25 注11前掲、拙論「『三国志演義』の涙の力学」、参照。

26 注2前掲、中央研究院のデータベースでは、「憤」は二十二箇所該当するが、第一一〇回の張郃の「憤怒」は「奮怒」の誤りであり、本稿ではカウントしていない。

27 丁管の描写を嘉靖本は「憤然高叫」、毛宗崗本は「憤怒高叫」に作る（第四回）。

28 注11前掲、拙論「『三国志演義』の涙の力学」、参照。

29 『三国志』魏書・荀攸伝には、荀攸が曹操の魏王就任に反対したという事績は記されておらず、荀彧同様の末路を辿ったとするのは『三国志演義』の虚構である。